裝束着用圖解

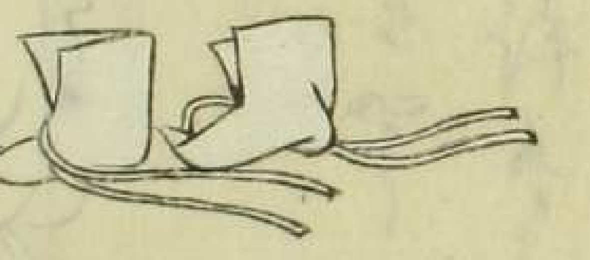
ワ 3
3549

右衣紋仕紙袖雲製法
者以像画之図説製法
花形出處分明而未知製
彌以姑終之擬様之
甲寅之春
楚洲生之

明治二十年四月廿四日 藤野漸氏寄贈

保 3549

韈



一束帯の時下襲の節襪とて衣冠の節ハ直足なり 但し
直衣冠直衣なとに襪とをくる事なれはともなし
一襪絲貫卿若くハ或中少将用之平絹ハ老年の人のみハ無紋
用ゆ絲貫の足袋をもしてもち用ゆし
一唐装束の時も顕文紗の襪を用ゆや

藤町澂氏遺愛之記

小袖之事

一下着白平絹或ハ白綾紅綾 五衣ハ葉色 殿上人ハ着用し

一更衣ハ四月朔日より九月卅日迄夏 十月朔日より三月卅日迄冬
装也 但装束の事也 九月九日より三月中綿入 四
月朔日より五月四日迄袷 五月五日より八月中帷子 九月朔日より
同八日迄袷 装束の時ハ小袖袷帷子共に白きなり 但し
着衣時ハ白平絹にて袷を着るなり

一衣紋(エモン)ハ公卿ハ二ツ衿 殿上人以下ハ一ツ衿 但束帯の時ハ衣紋ハ一ツ
衿之事 古ハ親王よりはじめ 勅許なくして二ツ衿を着用なし

一帯ハ昔ハ上より細帯也 ... 小袖の上にて結ぶ

一殿上人或ハ十五歳未満ハ十一月晦日より紅梅の薄様を白き袖にかさね
三月中旬迄 板物紅梅袷なり

冠之事

舊記曰冠之濫觴ハ人皇三十四代 推古天皇十一年十二月五日ニ
始メ冠位を行給同十二年正月朔日ニ諸臣ニ給フ冠ノ階十二色也
其製以錦絁之を頂撮總て而裳着縁を付て三十七代 孝徳
天皇大化三年十二月七色ノ冠十三階ヲ製給ヒ同五年ニ十九階ヲ
定ラル古冠ヲ止ラル大臣ハ猶着ス三十九代 天智の御宇三年二月
二十六階ヲ行ル四十代 天武帝ノ十四年正月ニ四十八階ヲ定テ累
古キ冠ヲ止テ漆ノ冠ヲ用ヒラル四十一代 持統御世又元ノ冠位ヲ
授給上古ノ冠ハ其製知人ナシ當時ノ冠ニも有シ又ハ傳ヘンヘラス只有
文ノ由而已ヲ糸ニテ閉付ル計也 天子ノ御冠モ為額半額不差有
有シカトモ今ハ其説不審今用ラル御冠ハ臣下ノ用ユルニカハル
事ナシ御内衣ハ紅ノ御袴御引直衣ニテ巾子紙ヲ入ラル事ナリ
臣下着用ノ冠ニ蝶ナリ厚額透額也透額ノ冠トハ申ニ少キ

月形ニスカシ其上ヲ羅ニテ引フサギタル物也故巾子ノ冠ナト云捻別
物ナリ元服ノ時服用ハ透額ヲ冠元服以後十六歳満ノ時用之十六才
以後ハ厚額ノ冠ヲ用ユル近代ノ例也舊記ニハ十六才以後モ浅官ノ人ハ
透額ノ由見ユ近代ハ一向無其沙汰也掛緒ハ本式紙捻ナリ組掛
ハ近代ノ事ト見ヘハニヘルナリ
桃花蘂葉ニ有文冠ハ小菱ノ紋ある羅を用ゆ近来羅紗等と
称して文分明ならされ共有文の由と冠ハ大小ハなく人の
頭に合はすへし 経師を免して頭を定らし 生年十五歳
とハ薄額十六歳以後厚額を用ゆ記を考きハ年令浅の
人ハ十六歳以後も猶薄額を用ゐるへし 是によりて京極太閤ハ卅
歳左大臣の時厚額を用ゐ給ひ 延久二年 後二条殿ハ卅二内大臣の時是
を用ゐ給ふ事あり 寛治七年 宇治左府ハ十八歳是も内大臣の時初て厚額を
用ゐ給ひ久安二正七右大将兼長ニ御案用厚額冠をユア問ひ陳云
殿下 謂余 十八歳用之 仍用之 伯云 余為大臣ト用之 汝雖同歳官卑

是ニ當リ而自今已後ハ用薄額なきや

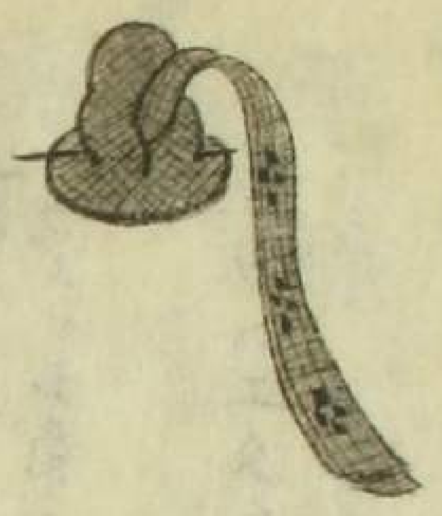
厚額

透額

一 十六歳未満の時用ゆ 十六歳以後ハ厚額を用ル近代ノ例なるよし
舊記ニハ十六歳以後も官卑の人ハ透額の冠のよし

纓

め記系ミ之有文有之云ノ由



纓のとめやう御下の纓ハ巾子なり上へ
出思やうあるへし

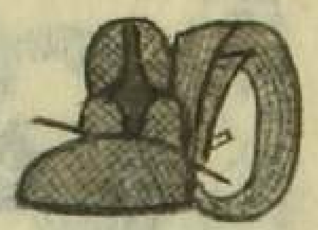
纓さしやうめ記

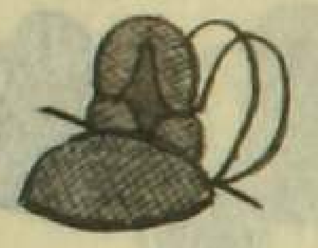
ト七串ト云簪やう寸法口伝有之也

巻纓

一巻纓大納言大将ハ闕腋纓を巻大臣大将ハ無腋纓を不巻なり

一纓を巻事禍の時のこと割纓を巻やうけ巻後の方にさしはさみ
おしまきのまゝ之巻ハ山科家墨巻ゆ巻ハ二ろ余家之



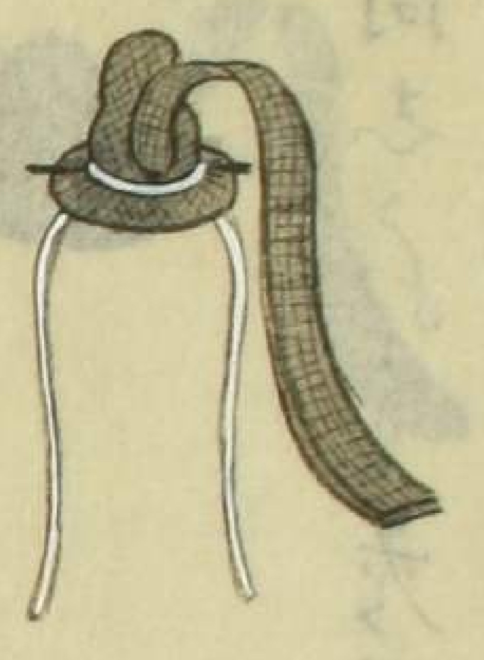


細纓ハ赤牛のほそきまなり

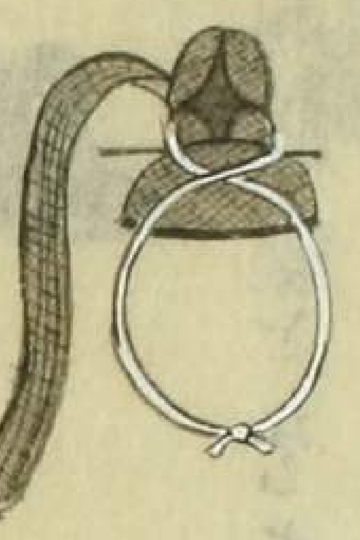
細纓

一諸府の冠ハ巻と同志々ゑ老掛を纓細纓等有之細纓ハ
武官華六位以下黒用ゆ

一掛緒ハ紙縒ニて纓ノ後巾子を前へ出し角ノ上へ引出左を上ニし
寸遠をとがいニて結び結髻ハ結ふる故し繙きより切る



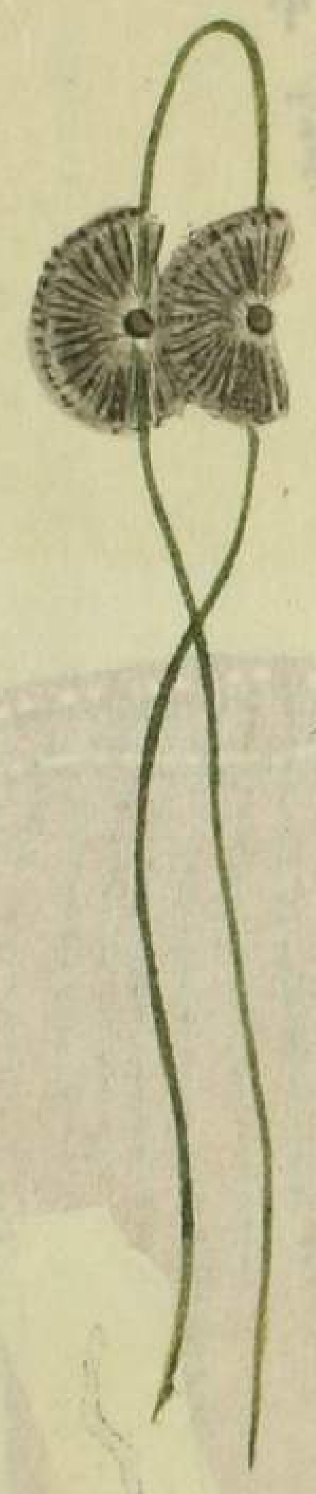
掛緒纓の後ニて寄せ結廻しとし



掛緒角ノ上へ先寸遠ニて結切る

一掛緒朱帯の儀ハ上下差別無く紙縒ニて冠ニ付結ひ公ハ紫組掛緒用る也又ハ
雖太結作法ハ組掛る
一説ニ組掛緒ハ蹴鞠の時飛鳥井家免許の者なし

緌



緌ハ馬尾ニて作る

一緌ハ緒ニて作る也 おとかいニて結ふ又冠ニ掛緒ハ常に懸るなし

古老の説ニ衆袖の後ハ冠を着するよし　也を代ハ装束烏帽
の装束あしきよしぞ装束烏帽子にて冠を着る所存にて不許容
就中云り

裏袴　亦大口トモ云

一表袴ともに紅生絹或平絹裏絹ニ而下ハ烏帽子也
生絹平絹ニ用生絹精好方を用ゆと云て

表袴　華

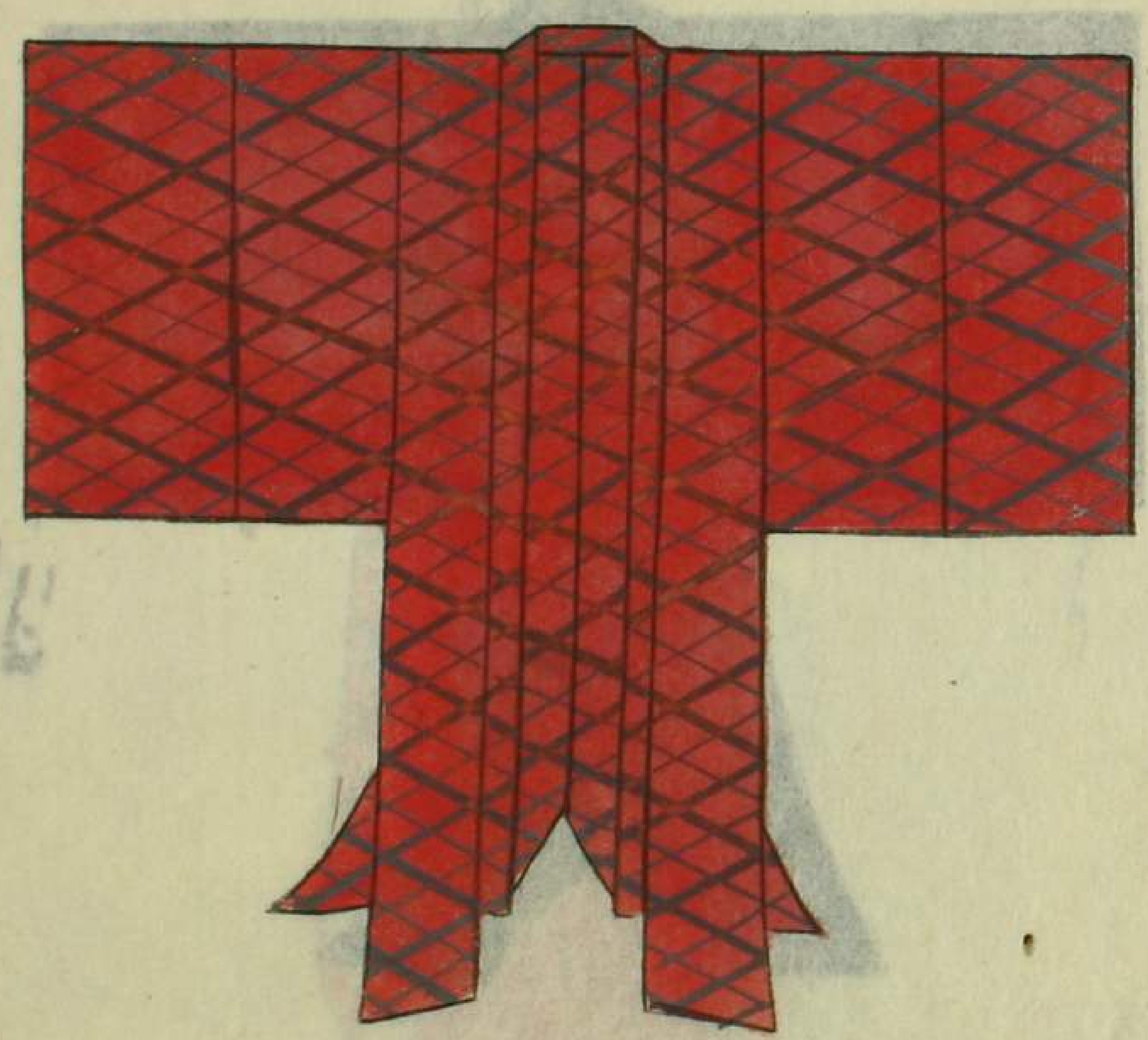
一十五歳以上ハ婦人も深黒きを用ゆ

着用之次第

一裏袴ハ子の方とさるんハ右脇ニあて後の帯を前へ廻し袴ハ
内ニなりたる方へ廻して左ノ脇ニて輪ニ一ツ結さげて帯の餘りを
挟へ袴ハ内へ入へし

右ハ左ノ方結さげ置し帯を挟へ
袴ハ内へ入へし

十五歳未満裏袴之様



半

一濃装束の時ハ半臂も濃色也　其外紗袖小ちくなさひで
用童直衣ニハ表半臂を用ル事も云々

一上古ハ新半臂を着て其時赤大口着るもの候　近来ハ
其内仕立し大帷子ニ用ルなり

一 十五歳未満ノ少年ハ青単濃単を用ゆへく

一 縹縁綾御若袴御紋窠霰也 上上皇親王若御 御伸事執

御時ハ白平絹 摂政中納言より大臣大将迄 め時用縁

綾窠霰の浮文裏ハ紅打平絹也 五位

御年 紫 禁色 殿上人 是也

表袴 窠霰裏紅平絹

大納言大臣ホの大将を兼時ハ唐文 藤丸大臣 大将を兼 納力條

霰丸を用ユ 文一目 晴ホハ 桜濃を用文

一 表袴 若ク 白文ち

表袴　白平絹裏紅平絹

一四位以下白平絹の袴を用雖五位侍禁色殿上人括引縫

一膝まて縫切しを膝縫（ヒザヌイ）と云　武官の輩多ハ用ゆ

着用ハ左の方足より踏入させ裾を押へ　右の方足を踏也や

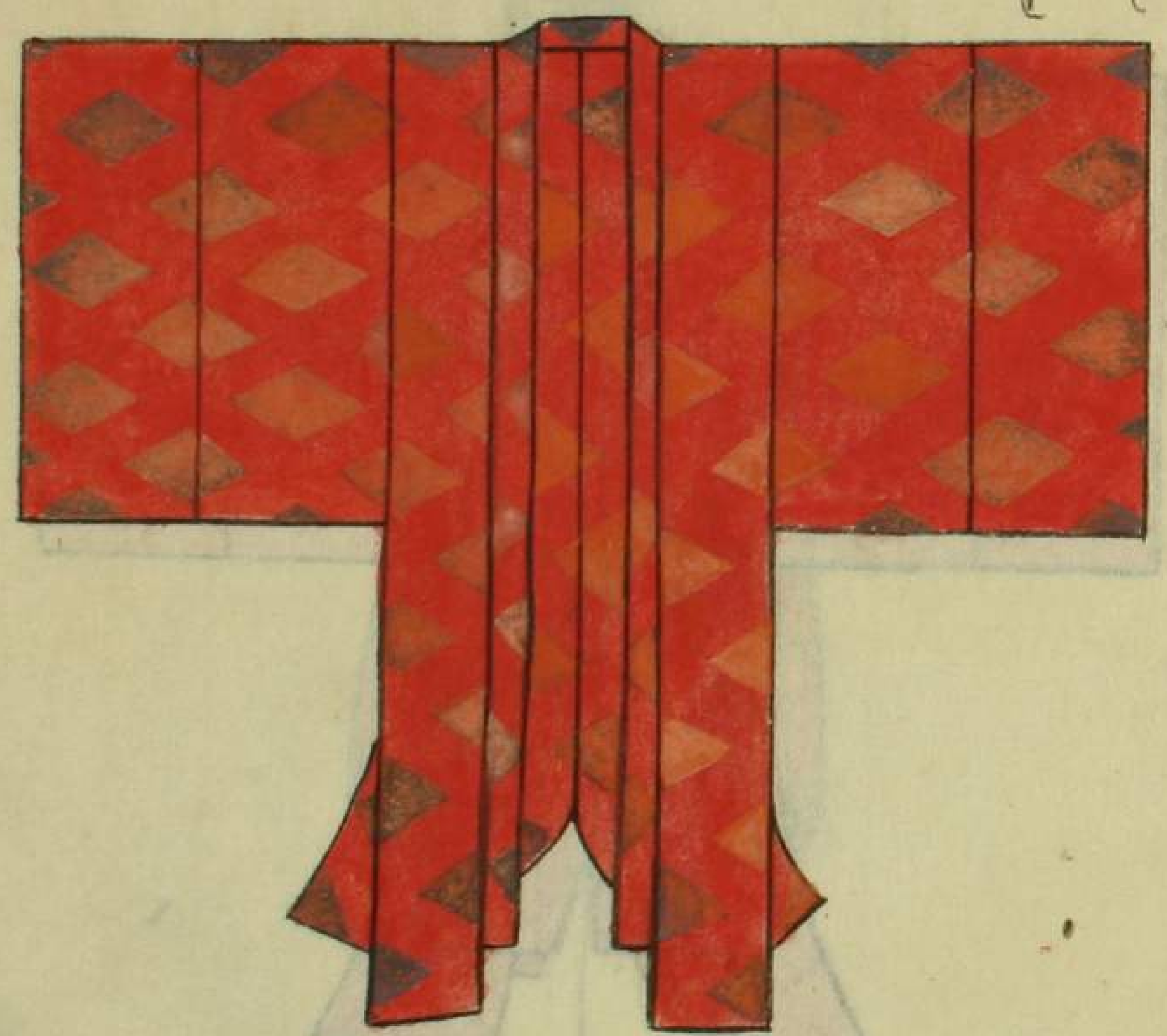
右足ゆひ入て門上蔵候様よ下緒の大口表袴の
左右を揃根する下襲か出るを好むと云説あるし
両脇ふ紛る説

襷結ぶ方はまんを先合紐をとし諸脇ゟ廻を通し左の方
来合て紐を右の脇にて結ふ

次右に
結ひさに足を踏出て前を右前に合せ秘右の方を袴の内へ綱を引
通し「テヌ引ク」右の膝を下の太口ノ下へ結て帯の先引掛て
永慶ヨリ
袴内へ入る
於云下大口表袴共に先年誤(アヤマリ)而更不足行方ハ腰合てあり左ち目を右へ
合して前の紐ハ袴の下へ通し後の紐ハ前の袴の上を通し右の足ち目の
方にて紐ちを取合して結ひ袴の内へ入行方長キ方をはさみして下ル所
踏込ハとくる

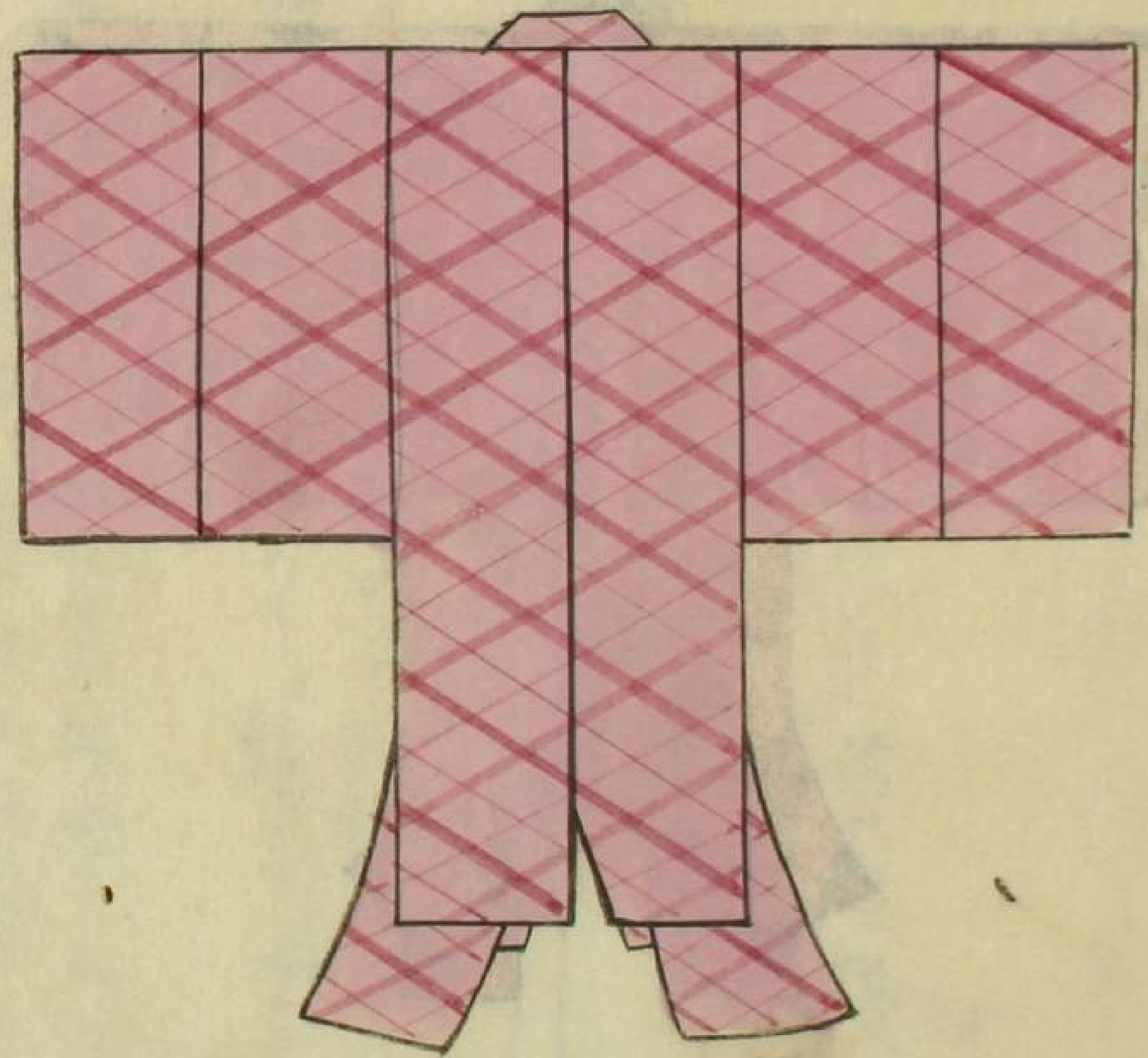
一 天子御袍御神事の時ハ白袍を召御服ふ　皇太子紅御袍小葵綾或ハ
平絹也揚巻ハ小葵ノ紋摂家色ニ用之東宮ハ凡表袴色ニ同し将軍家ハ
桐唐草之公卿ハ赤袍若き
中年以後ハ遠菱壮年之
紋之

袍
紅遠菱



一童束帯ニハ濃キ袙 直衣ニハ蘇芳ノ袙 紋ハ菖蒲 壮年ハ
萌黄 紅色ホ比濃袙なり

袙 紅色 重紋



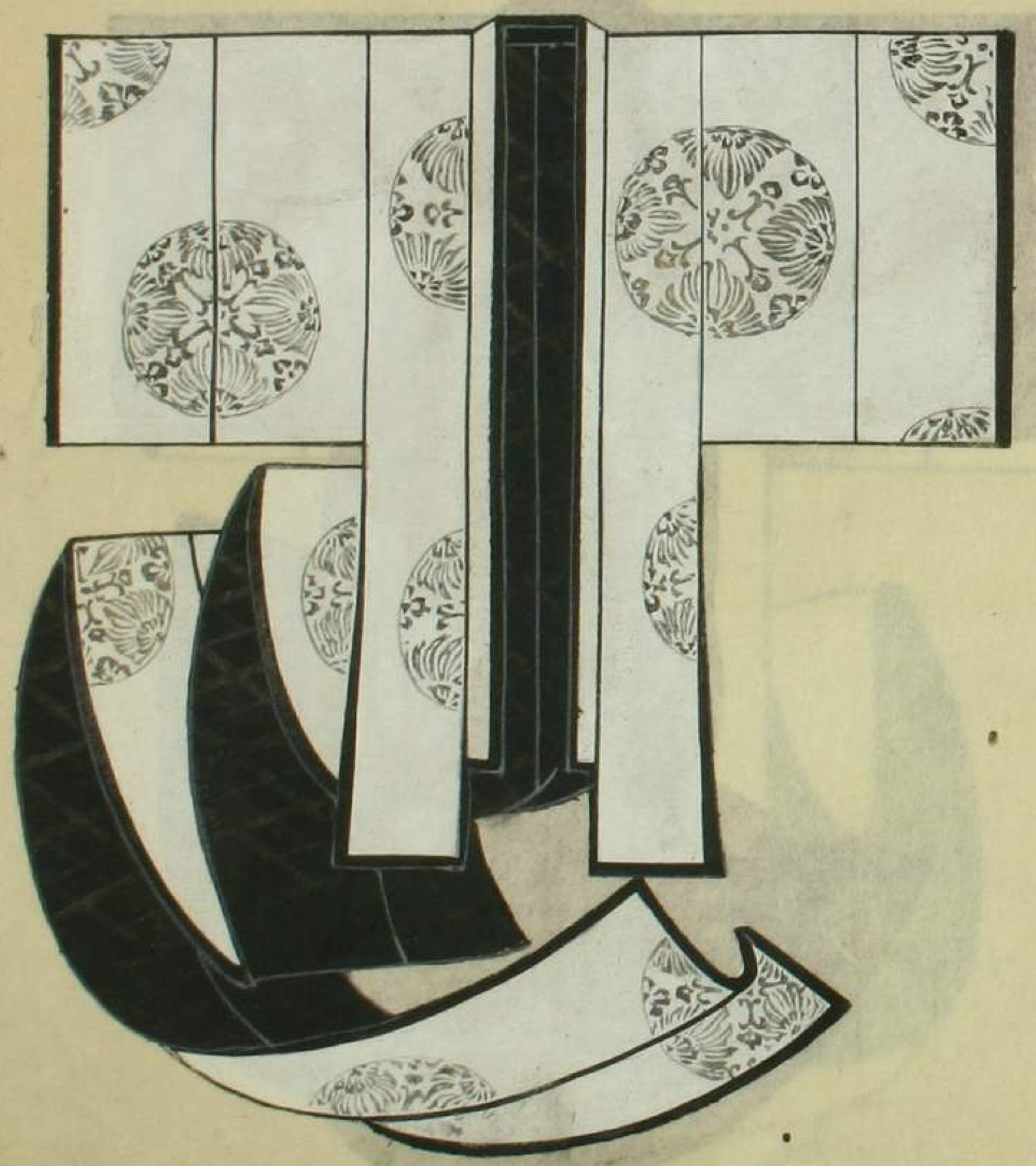
上古より紅袙を着用して表袴を着るのよしや

壮年ハ袖落シ石図ニ見え申候

一 襲上古ハ装束ニつきて見え申類ニより 切割て通来 裾とも之続

以上 冬ハ表白浮線綾裏重菱 是きや壮年見え申候

襲 冬

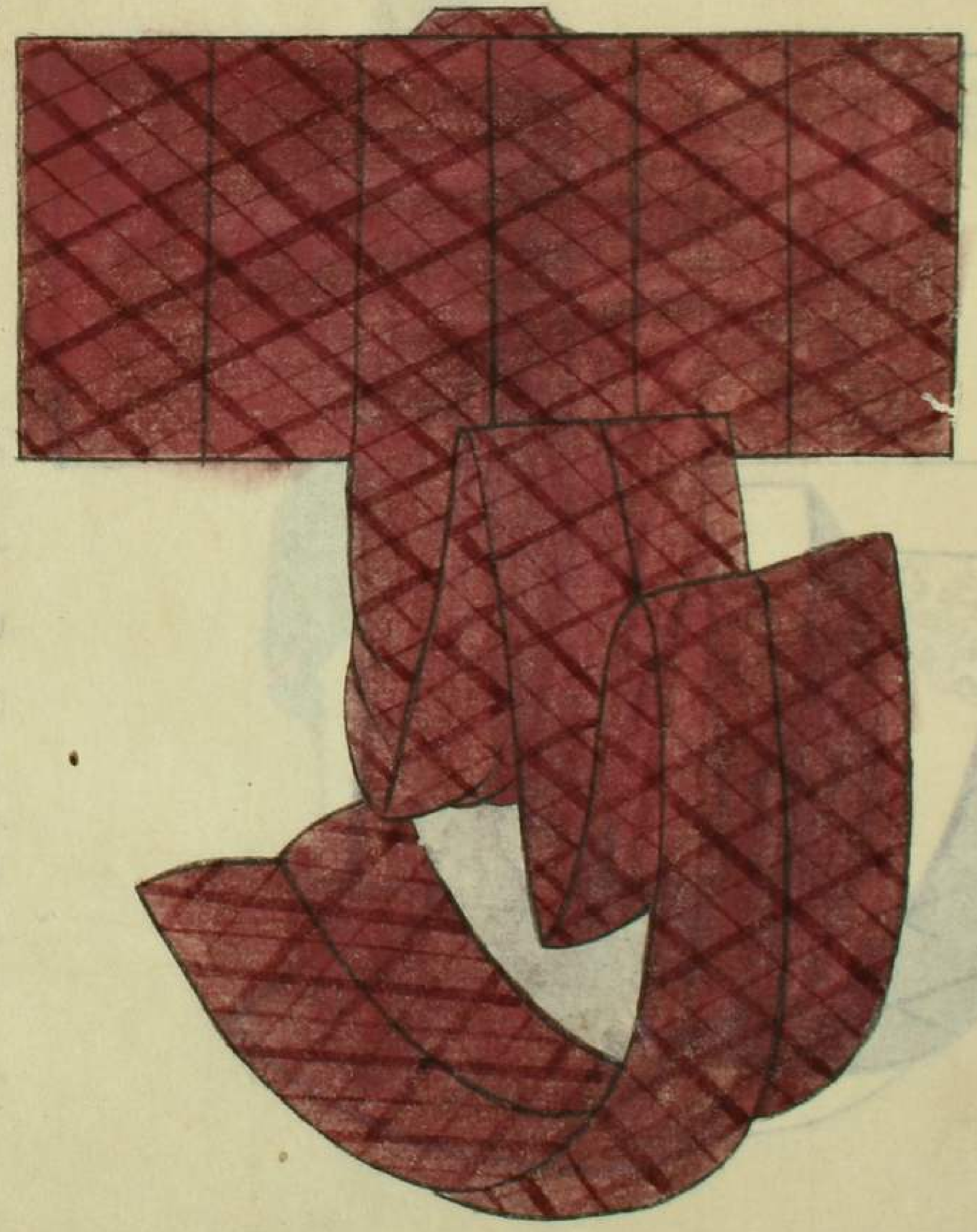


一 裾菱ハ立菱にして見え申候 裾ハ之所ニ記

襲　夏

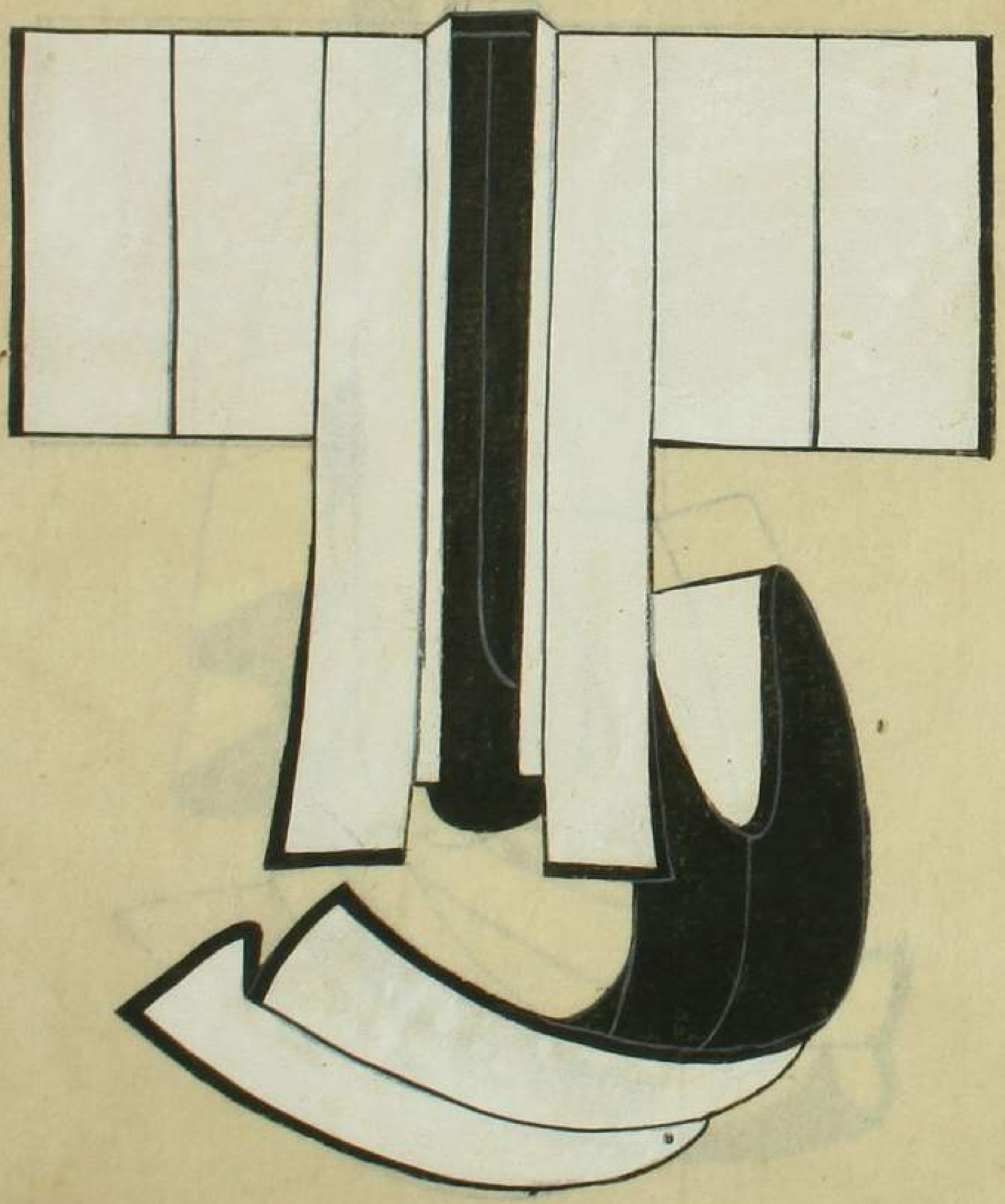
一三位以上壮年夏唐　物綾芳紋之菱之

一搔取ハ之菱ニして　[illegible]用し　[illegible]来て記



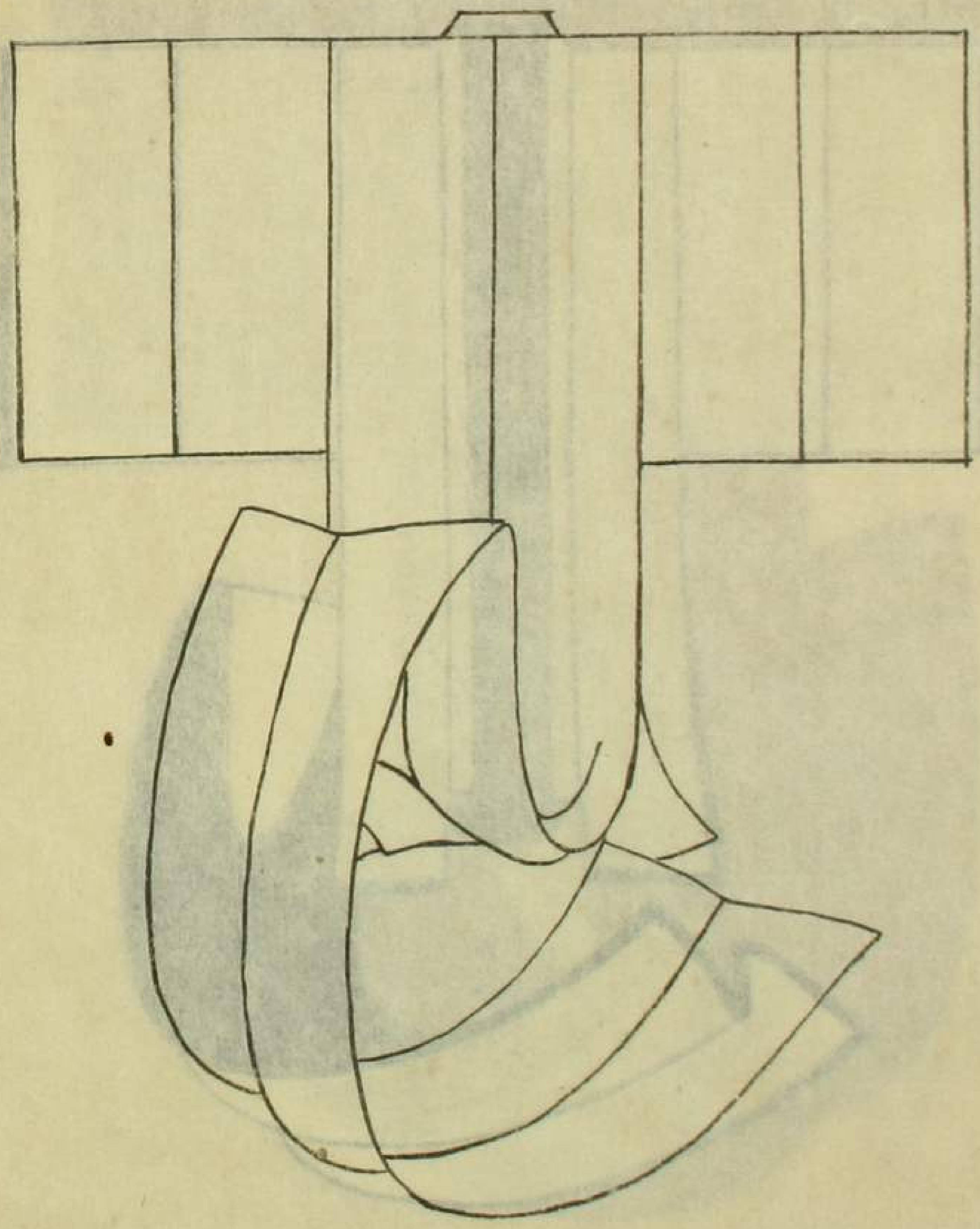
一四位以下ハ冬表白平絹裏黒き平絹之

襲　冬



襲 夏

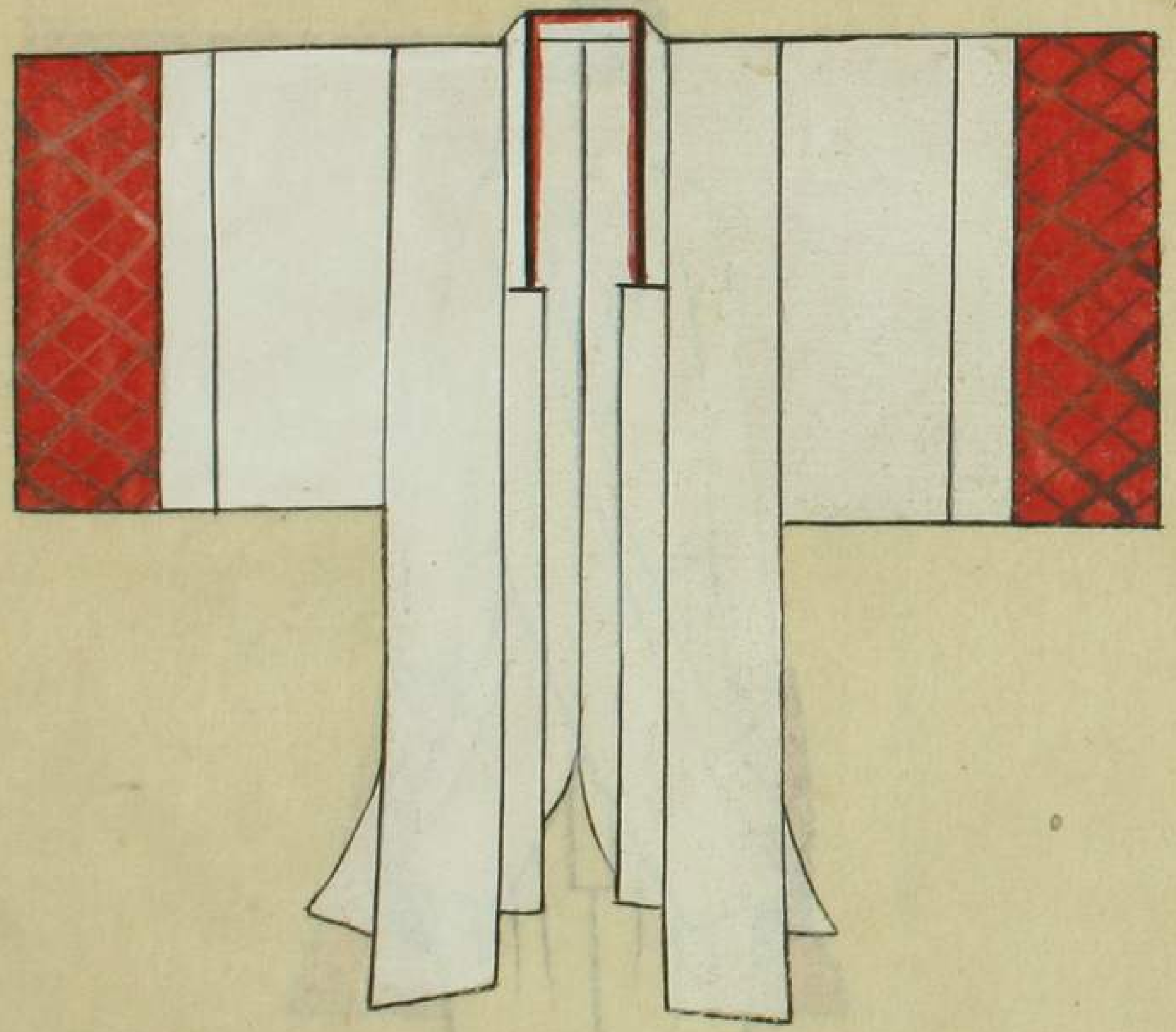
一 四位以下ハ菱縠二藍也之



一 上古ハ単絹の上ニ襲を着せし 事あり 後ニ着用なくなりて
切別て すそを 継ぎして 用ゆ

大帷子図

肝衣云
袖單トモ云



一大かたひら図ハ白練ニ裏單ニ切を付袖ふと單ニ切を付て大かたひら
用ゆ其外ハ各略して衣冠の時とそを用ゆ

大〻郎ノ装束め郎前

一大〻郎ノ装紅襦ニ装ノ襟切草を付袖ニ草を付ルさ袮草取略
袖ニ草ハ切を付ルなんぞや袖草とも云

大
帷子表

大帷子若年少将様

一裾ハ元来下襲ノ尾ニ依テ襲ニかゝる事也上古ハ續たるを若我
無しきとて切別裾と云る也切と大さ記ろ故上於ヽ慮て略之構ゑヽ
役用壮年ハ少将立菱裏表浮線綾く

摺袈
裾 冬

立菱壮年
遠菱中年以様

一夌ハ三位以上蘋芳菱純次第年齢ニ々有菱 遠菱之
道々云建暦宣旨云下襲裾寸法大臣一丈大納言九尺中納言八尺参議散三位七尺四位已下六尺云々
然外捻非違使別當已下自元短裾官戴非此限

掛ゟ
裾 夌 遠菱中年以後
壮年八重菱之

一裾長短
大臣 壱丈三尺
中納言 壱丈
二三位 壱丈二尺
一位大臣 壱丈六尺
参議 八尺
四位 七八尺
大納言 壱丈壱弐尺
貫首内藏頭 八尺
五位 六尺
六位 五尺

一綺ゟ 三位以上中年以後冬ノ裾白浮線綾黒裏遠菱 より菱之

裾 冬 三位以上中年以後

一同夏蘇芳色之

裾 同夏

一諸家三位以上壮年冬裾白浮線綾黒裏之菱よこ菱之

裾 冬 三位以上壮年

一同麦穫芳色也

裾 月
名

一四位以下ハ各名ハ白。平絹裏黒き平絹之

裾 四位以下
名

一四位以下裳并裾穀色 二藍之

一裾付様ハうし結よりの紐あて紐を前へ出し

右之紋散ハ大かた製する節用ゆる也
袍のうへにかさねる事ハ袍を着る時ハ略節御遊にある事なりと云私

裾を付てうへにきる人ハ左方へよせ垂る也 袍ハ供奉をも上のきぬを
着る時ハ裾のさありし御出へあるなりと云私

袍之事

一 表衣（うへのきぬ）とも云 表服ハ神代より始る 又千波也杯
云ふなり 十七代 應神天皇の御宇異朝より衣縫の女を貢
大宝の令より異朝の衣服を用ゐる也 袍 天子親王臣下
着る事あるに及びて色と紋とを定めて 縫掖ハ闕腋縫腋の
二色也 袍の紋ハ当時の身分による事なし

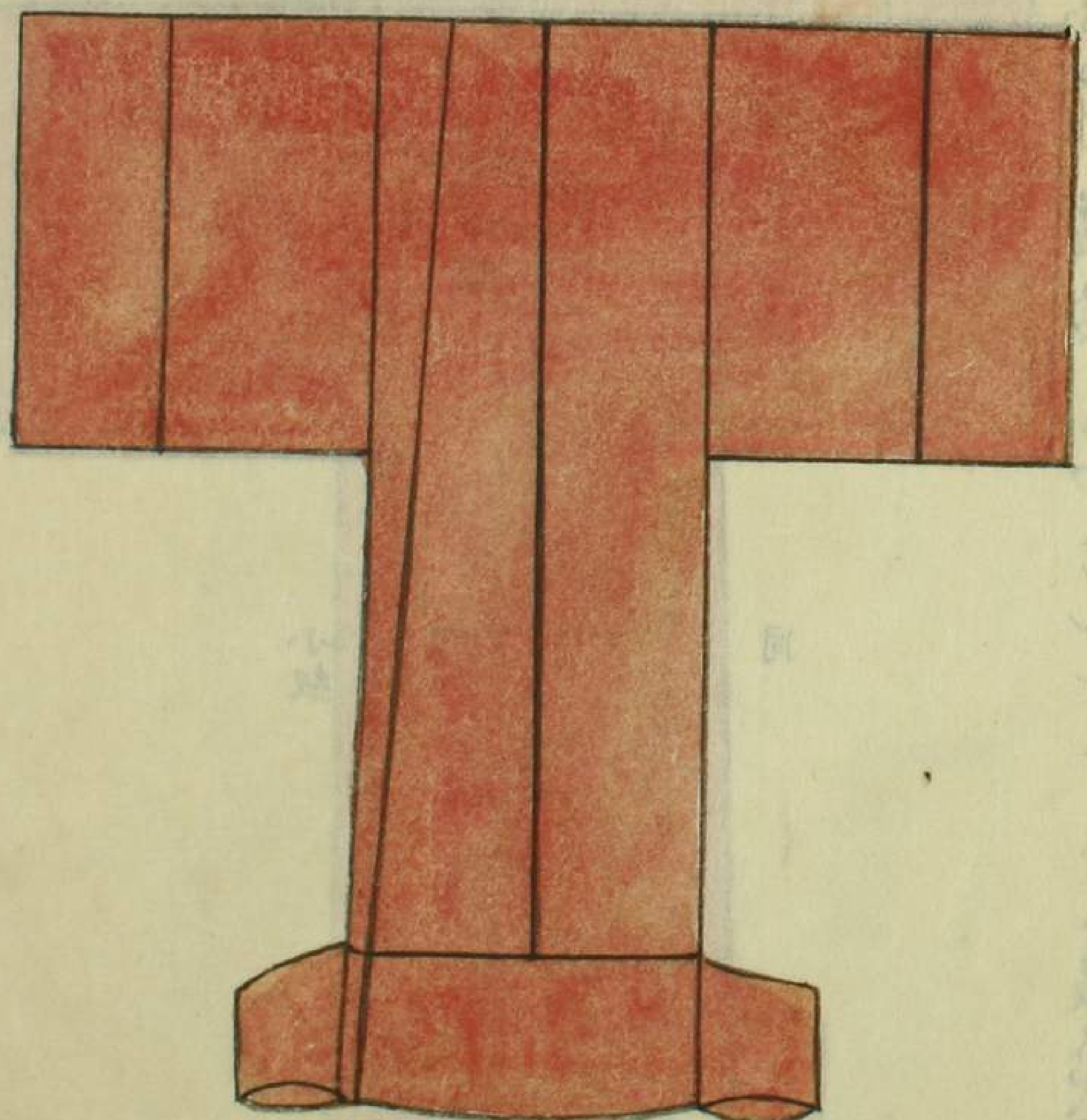
一 臣下袍 一位深紫 二三位浅紫 四位深緋 五位浅緋 六位深緑 七位浅緑
八位深縹 初位浅縹 上古ハ袍の色位によりて定まりし 近代
位色深しと四位以上皆黒き袍を着し世の色の儀なる由旧記にあり

一 袍紋 大臣 雲鶴 若松の草 摂関 雲立涌 浮線綾 大臣 丁子の菓 家々紋 納言 雲の菓 家々旧例に依

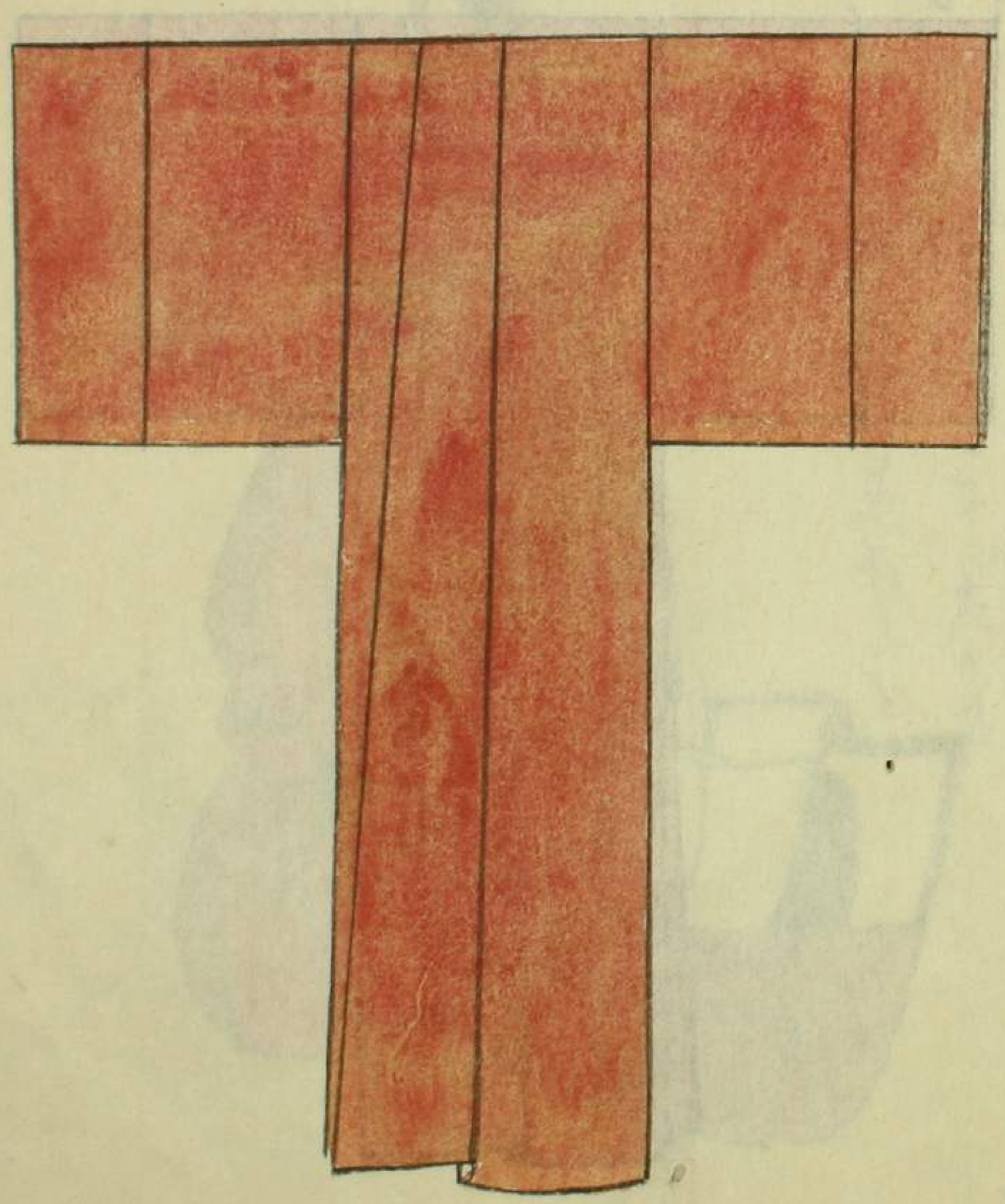
四位五位ノ縫腋

袍の長短ハ人の大小ニ随ヒ中人服寸尺を以記し

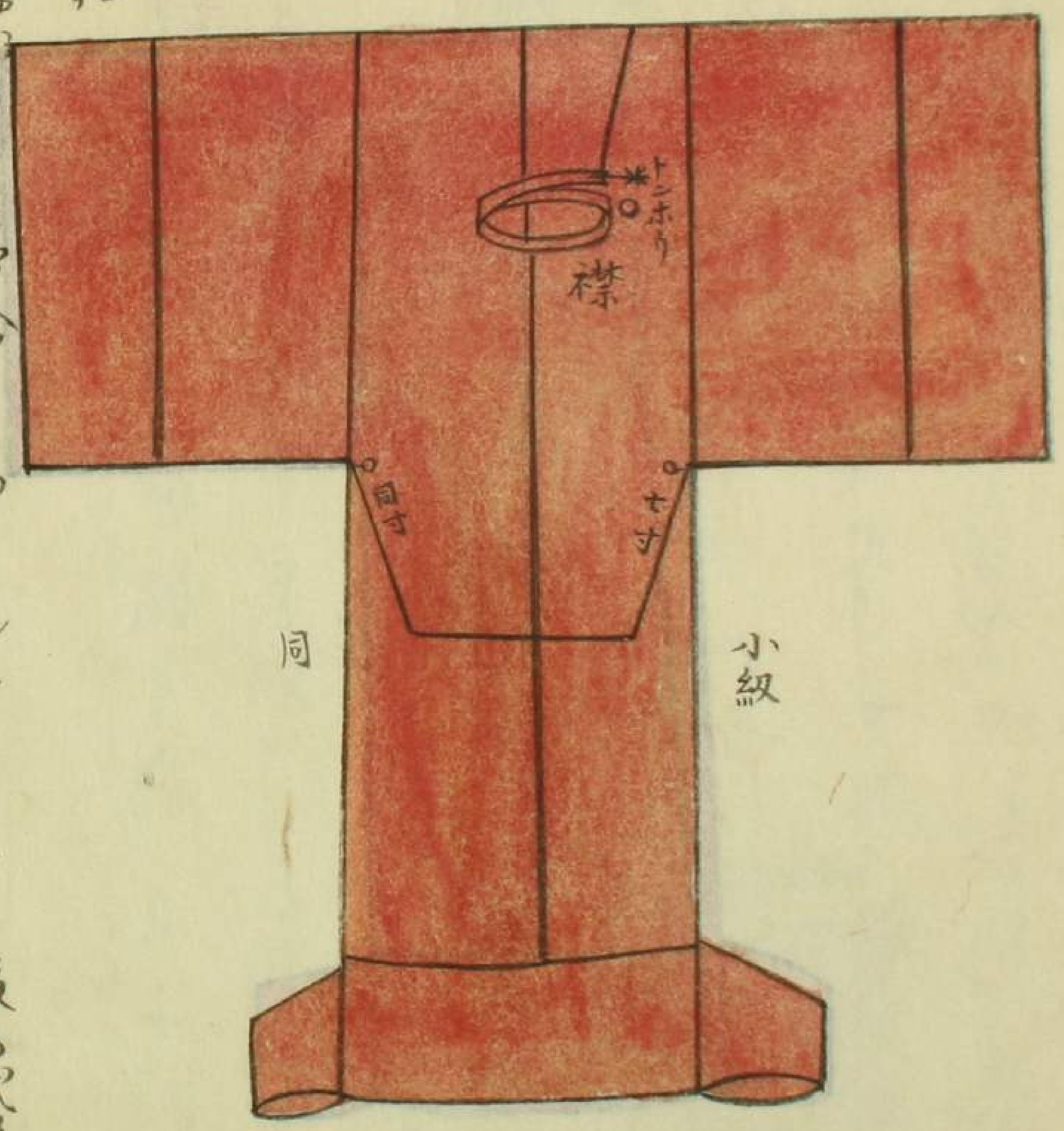
袍 縫腋帯



袍 闕腋前

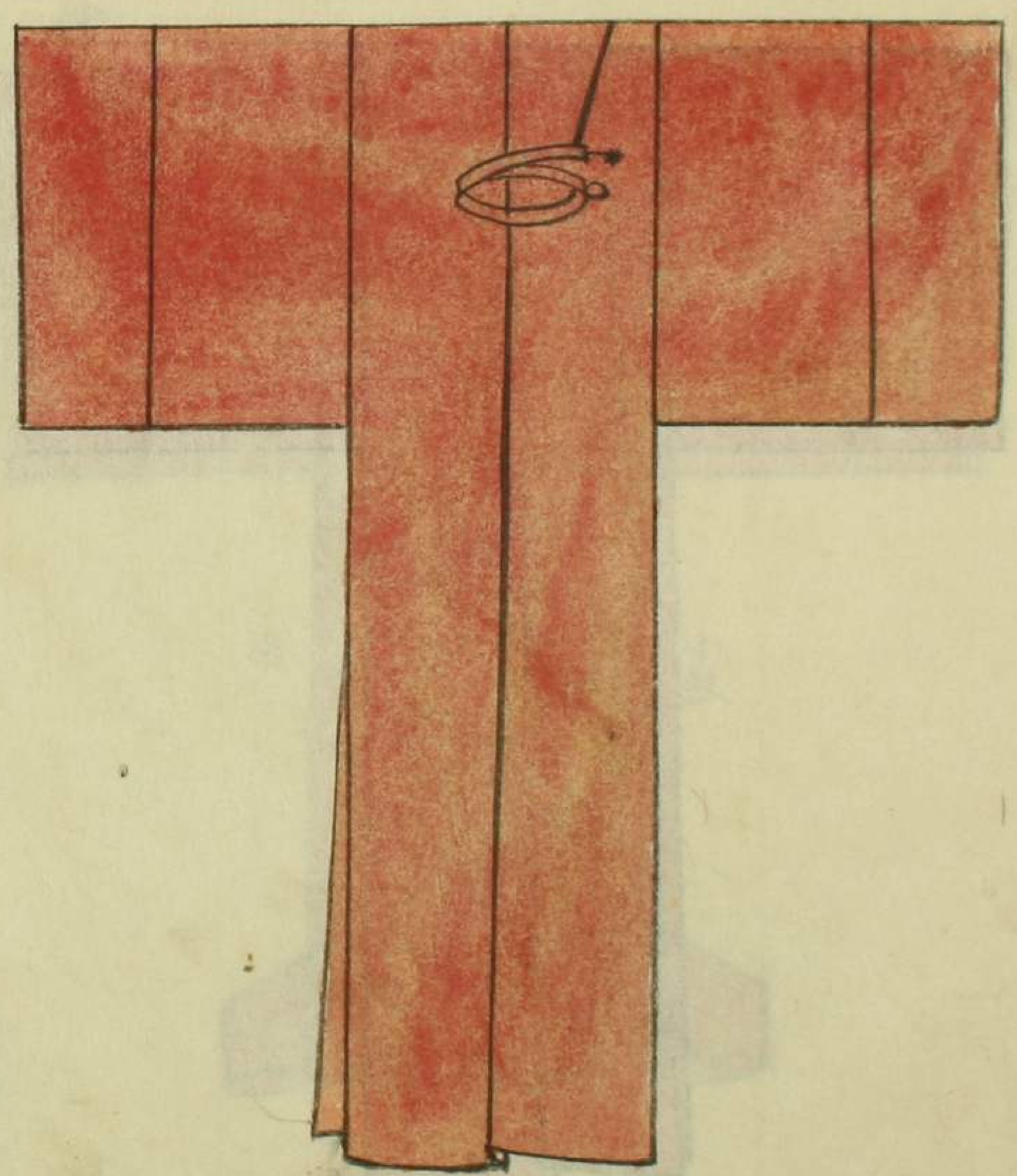


同 後



一袍名有大袖とハ裏なき袖なり鰭袖とハ裾迄幅なり襟とハ襟なり蜻蛉とハねとんきもこへとハ後の袋なり
ありさきとハ衣裾下りなり闕腋とハまちをぬよこぬいつなきのほうとハ裏の身なり

円袴



袍着様之節袍拾事附けし縫より前の袖口へらしろより手を入引寄
襴を拾たる事上之の方へあけ拾し襴と下之左の方
大きくひろの先をみさる袖を袍の袖口へ引出しそえ持つを
らし縫ありける

袍着させ前へ出り上より下より揃え

袍左之通り揃を上よりのけ下までを表の袴ゟ前へ据へさせ
其ゟ内比あたり襴ある下右五位ハ之里の色を襴ハ上ル四位ハ三里ゟり
少下りある裏袍襴を下ケ袴の比きある所え見え上まで
下までの通りさえ揃まで紋文の有押て張てし

主人先行けむ御かくし給ふて　上り主人志きんの志揚るなるへく

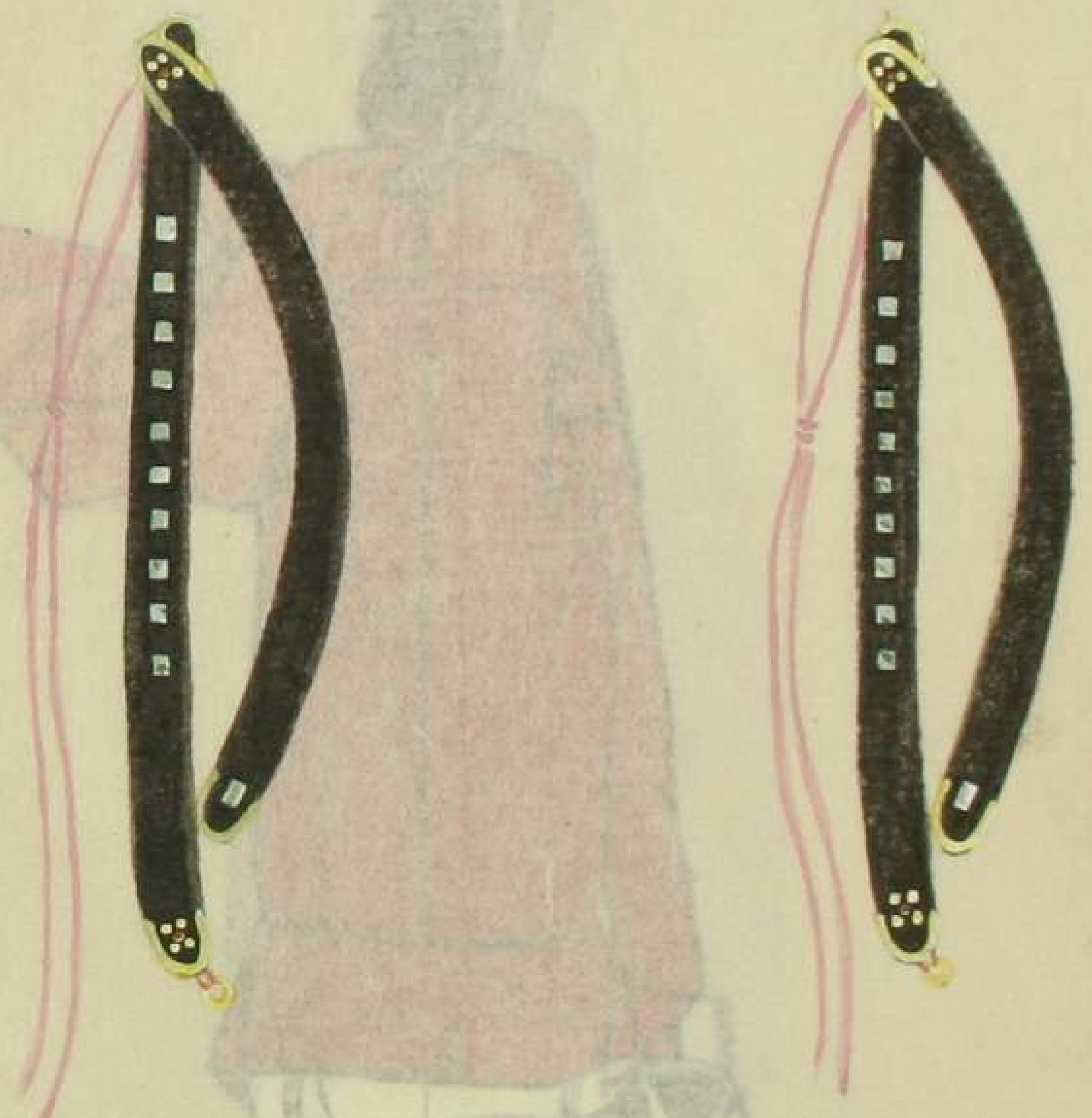
かし給の方へたゝこへめ給出方し裾内のかへ押し給の袖を入
左右の手をよく出入門主獨前同前なるへく乗上ル

をこへめしつ引上たるまゝよりハ裾おとさるゝやうに引上たる

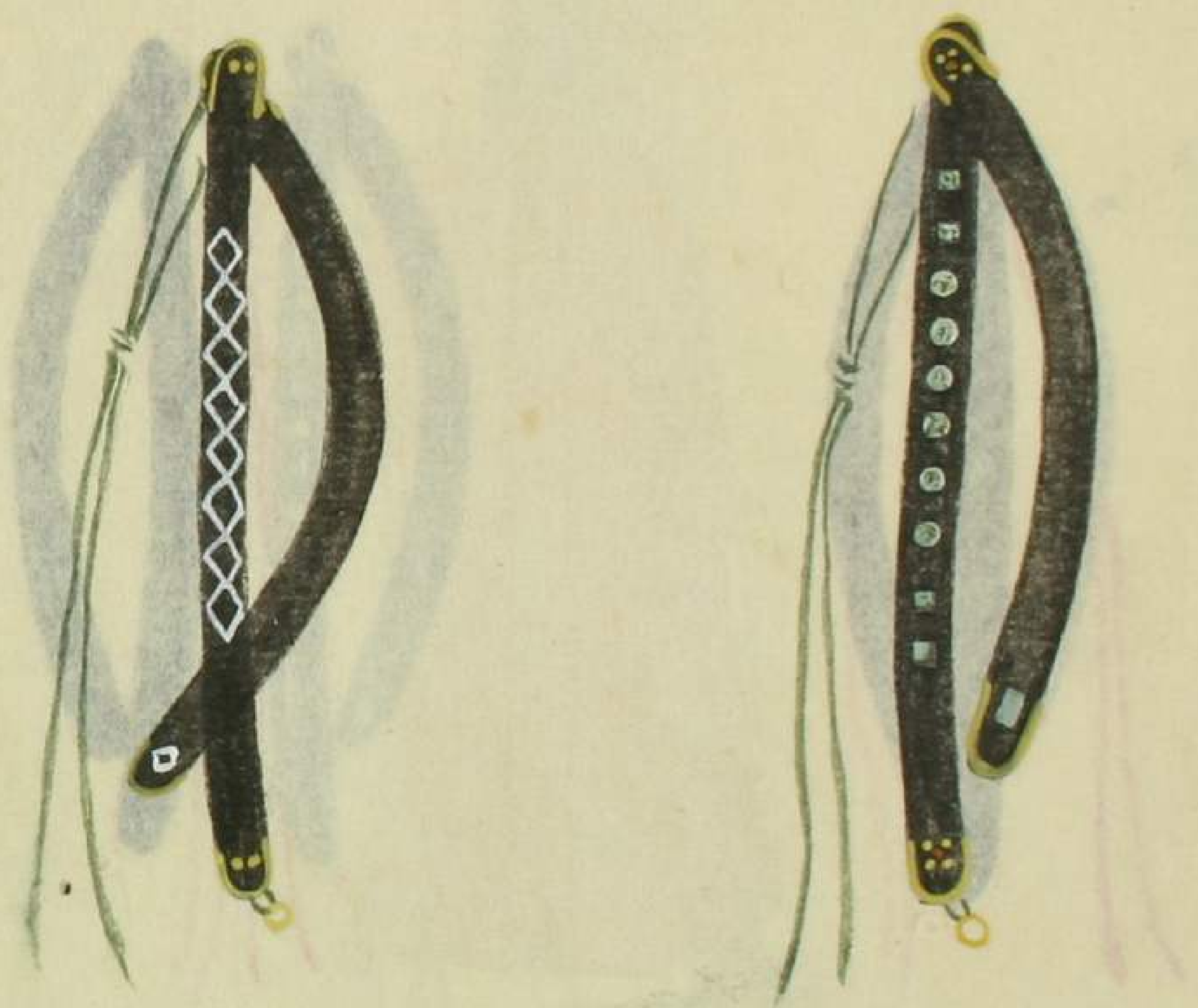
をこへ引上て めしつ下ハ上とも口傳

右こへ右の一ッ折て上げまとめ折り候

右を上にて角を立てれ角頭八寸裾限より折出し前にて左へ先もんの右に
手へ折て押し立たる角をとらし後先もんの右にちそなまえ右に角頭合
袖の通より折出し右にて此角より折出し前と前先とん押しおなぶる



角ト云ハ御ぬいめ遠るき板ニテ右帯角の内へ入上手を左手力へ
引してたる右手にとくと入前ニ有之実打出寄りて入念を先押是ル手と
云ハ御の者躾手押ル



石帯掛て後に御装束の裾とかゝけ主人装束石帯なとへ
打ひかけ遊ばさへうみ志るし候

石帯しめて主人の後ろ上下より通り遣るときやうにして主へに
さゝりゐる不ふ也石帯ひかへ周にて也こむ時
裾ゆりくりと思ひそめる裾のうちを持ひ入させるへ
裾へ

袍袖へ両手を入下の大きくひらと引て後へ左右也
手を入袖さばきてしる

袍の袖さばきのよろしく人の方へ参り拝ハ

右之画袖於小袖後ろ之方 に袍出たる所 於之袖也
ひとへにし侍

着用之後ろ姿

著用の前也部